研究ノート

北米日本人基督教学生同盟の研究

辻　直人

はじめに

既に筆者は，20世紀初頭のアメリカにおける日本人学生会の結成と全米に及ぶ学生会同士のネットワーク化についての考察をしてきた[(1)]。すなわち1897年に活動を開始したカリフォルニア大学の加州大学日本人学生倶楽部を筆頭に，ハーバード大学（1898年結成，以下同様），コロンビア大学（1901年），スタンフォード大学（1903年），シカゴ大学（1904年）等々，各大学でJapanese Student AssociationあるいはJapanese Student Clubと呼ばれる団体が次々と生まれ，大学内の日本人学生の交流の場として用いられた。その後，YMCAの関連組織である外国人学生親善委員会（Committee on Friendly Relations among Foreign Students）の働きかけで，1916年より英文雑誌 *The Japanese Student* が発行されることによって，全米に及ぶ大学間の日本人学生会ネットワーク形成が目指されるようになった。同誌は全米各地の日本人学生会の動向を紹介したり，YMCAの企画運営したキャンプの報告をしたりした内容であった。同誌刊行の主たる目的は，第一に「日本人留学生たちの記録を残すこと」，第二に日米間の知的交流を促し両国の親善を深めること，第三にアメリカ社会を根底で支えている「霊的な雰囲気」を

日本人学生も感じられるようにすることとされていた[(2)]。

実際に，戦前戦後に同志社総長を務めた湯浅八郎は，1916年から1920年に在籍していたイリノイ大学大学院で，学内における上述の委員会が企画した留学生交流プログラムへの参加やアメリカ人家庭への訪問をしてキリスト教精神に触れ，自らの信仰を回復している。更に国籍を超えた世界平和実現のためのキリスト教運動に触れることで，湯浅もキリスト教国際主義のために尽力しようと決意したことも，拙稿で明らかにした[(3)]。

以上の先行研究を踏まえ，本稿では在米日本人学生団体の1つである北米日本人基督教学生同盟（The Japanese Students' Christian Association in North America, JSCA）について着目し，同団体が組織された経緯と目的，実際の活動内容について明らかにしたい。The Japanese Students' Christian Association という名称は，後述するように，1916年の段階で既に *The Japanese Student* の中でも見受けられる。当初はJSCAの活動は地域的に限定されていた。しかし，1920年代頃からその活動が活発になり，全米に及ぶ広範囲へと広がっていった。このような変化の意味することは何か，検討してみたい。

1．日本人学生会発行の定期刊行物について

本稿で使用する主たる史料は，*Japanese Student Bulletin*（以下，*Bulletin* と略記）と呼ばれるタブロイド版の英文定期刊行物である[(4)]。同誌は1922年5月に創刊され，管見の限り1936年3月号（Vol. XV, No. 1）まで刊行されている。創刊当初は外国人学生親善委員会が発行者で，日本人学生書記長が編集を行っていたが，1924年10月号（Vol. IV, No. 1）からは全面的にJSCAが編集主体に変更になった。同誌には，各地の日本人学生会の動向の他，JSCAの活動内容，また日本人学生が

直面していた様々な課題についても書かれている。同誌を創刊した理由については，以下のように説明されている。すなわち，アメリカ国内にいる日本人キリスト者学生同士が，より緊密な交わりを持ち，神の国に奉仕するためのよりよい協力を得ることが長らく熱望されてきた。しかしお互いの距離が遠く各地に散らばっているため，その実現は困難であった。そのような状況を矯正し協力体制の強化を図ることが同刊行物発刊の目的とされた。同誌は日本人キリスト者学生間で読まれることを想定しているが，それは決してノンクリスチャンを排除するのではない。全ての在米日本人学生に届けられ，キリストの愛が伝わって欲しいと願って創刊された[(5)]。

Bulletin は創刊当初は隔月発行だったが，1924 年 10 月から，すなわち JSCA が編集発行を行うようになってからは月刊になった（7 月から 9 月は休刊）。発行部数は 2500 部にのぼり，全ての在米日本人学生と日本にいる支援者たちに無料で配布されていたという[(6)]。

「はじめに」でも触れた通り，これまでも，類似した定期刊行物 *The Japanese Student* が 1916 年 10 月から 1919 年 10 月にかけて発行されていた。同誌は当初は隔月刊行で（1918 年 11 月号，Vol. III, No. 1 以降は月刊），外国人学生親善委員会協力のもと，編集室はシカゴ大学エリスホールに設けられた。編集スタッフには，シカゴ大学に医学留学をしていた加藤勝治が一貫して編集長を務め，賀川豊彦や小崎道雄，笹森順造も一時名を連ねていた。しかし，同誌は 1919 年 11 月に *The Japan Review* と改称した後 1922 年 1，2 月合併号まで続いて廃刊となった。

Bulletin が創刊されるにあたり，*The Japanese Student* や *The Japan Review* を引き継いだような言及は一切ない。しかし，創刊当初外国人学生親善委員会が編集に関わっていること，また内容も類似しているという点から，編集方針は基本的に引き継がれていると考えられ，

実質の後継誌と捉えて間違いないだろう。

こうした日本人学生に関する定期刊行物は，当初は大学ごとに発行されていた。

1907（明治40）年8月，加州大学日本人学生倶楽部によって『麦嶺学窓（*The Berkeley Lyceum*）』という定期刊行物が発行されるようになった。内容は日本語及び英語で書かれており，管見する限りで1917年11月の第八巻まで発行された。日系商店等の広告も多く掲載されていて，多くの資金援助と共に編集発行され，学内だけでなく地域にも配布されていたと見られる。加州日本人学生倶楽部自体はその後も活動を継続しており，1932年には新たに *Campanile Review* という英文の印刷物を定期的に発行している[(7)]。『麦嶺学窓』と比べると紙質は悪く，タイプライターで打った原稿を謄写版印刷して簡易製本したもので，所々文字がかすれているような内輪向けの印刷配布物だった。

他にも，1912年より南カリフォルニア大学では『南加学窓』が創刊され，スタンフォード大学でも『スタンフォード』（1922年頃創刊），シカゴ大学では『市俄古評論』と称する雑誌が市俄古大学日本人倶楽部によって刊行されていた。1915年10月1日発行で第6号，1915年5月15日で第7号（1916年の間違いと思われる），1917年5月には『市俄古学苑』と改称されて第8号が発行されている。いずれも日本語による編集である。

では何故 *The Japanese Student* や *Bulletin* は英語で発行されていたのか。考えられることは，支援しているYMCAや外国人学生親善委員会の関係者にも内容が分かるような配慮だったのではないか。全国組織として活動していることから，全米で広く読まれることにもなり，活動の浸透を図るためにも，英語が用いられたと考えられる。

2．JSCA 結成の経緯と目的

在米日本人学生会は，冒頭で述べたように，各大学で独自に作られていたものが多かった。*The Japanese Student* の創刊号巻末に掲載されている日本人学生会一覧では（表1），全21団体のうち12団体が大学内に組織されたものである。一方，日本人キリスト者の団体は，南カリフォルニアとサンフランシスコ湾岸都市に2つ存在していた（表1のうち6番及び7番）。この他，大学やキリスト者と限定せずに地域を基盤とした学生会も組織されていた（2，8，9，12，20番）。

表1　1916年時点の全米日本人学生会一覧

番号	団体名	都市名
1	College of Pacific, Japanese Student Club	San Jose, Cal.
2	Colorado Japanese Student Association	Denver
3	Columbia University, Japanese Student Association	New York City
4	Harvard University, Japan Club	Cambridge, Mass
5	Japanese Association of American College Graduates	San Francisco, Cal.
6	Japanese Student Christian Association of Southern California	Los Angeles
7	Japanese Student Christian Association of Bay Cities	Berkeley, Cal.
8	Los Angeles Japanese Student Association	Los Angeles
9	Middle West Japanese Student Association of North America	Chicago
10	New York University Japanese Student Association	New York
11	San Francisco High School Student Association	San Francisco
12	Seiyu Kwai	Seattle, Wash.
13	Stanford University Japanese Student Association	Stanford
14	University of California Japanese Student Club	Berkeley, Cal.
15	University of Chicago Japanese Club	Chicago
16	University of Illinois Japanese Student Association	Champaign, Illinois
17	University of Michigan Japanese Student Association	Ann Arbor, Mich.
18	University of Utah Japanese Student Association	Salt Lake City
19	University of Washington Japanese Club	Seattle, Wash.
20	Vancouver Japanese Student Association	Vancouver, B.C.
21	Yale University Japanese Student Club	New Haven, Conn.

出典：*The Japanese Student*, Vol. Ⅰ, No.1 巻末リストより作成

つまり，表1から，本稿で扱うJSCAは，1916年時点では西海岸における地域的な団体の名称に過ぎなかったことが分かる。それが，全国的組織になっていくのは，いつのことだろうか。

*Bulletin*に拠れば，全国的な日本人学生のための組織は長らく望まれていたが，1923年にJSCAという組織が提案されるまで，話はまとまらなかった[(8)]。同年12月26日から1924年1月1日にかけて，インディアナポリスで開かれていた学生ボランティア会議（Student Volunteer Convention）における日本人集会で，ロイ・H・アカギ博士（Dr. Roy. H. Akagi）がJSCAを提案したことが，JSCA結成のきっかけとなった。この会議には，全米63団体の代表者として92人の日本人学生が参加していて，これは日本人学生の参加者数としては過去最多であった。

アカギはその時，外国人学生親善委員会のスタッフとして，ニューヨークで日本人書記長（Japanese Secretary）を務めていた。アメリカにおける日本人学生会の状況を一番把握していた人物と言える。そして12月29日に，組織作りのための委員会が作られ，まず7名の委員が選ばれた。すなわち，Sohei Kowta（オハイオ州デイトン中央神学校），Ryoichi Sawano（シカゴ大学），Frank Nishio（ワシントン大学），Taneo Taketa（カリフォルニア大学），Namio Ohtomo（ミシガン大学），Misaki Shimadzu（シカゴ）とアカギの7名である。

この委員会で確認されたことは，これは学生限定の学生たちによる組織であり，決して学生に押しつけられるべきことではない。組織としては，各地に支部（Unit）を設け，支部メンバーが中央執行部を継続的に任っていくことが望まれた。また，外国人学生親善委員会からは，日本人書記長が各地の日本人学生及び支部のつながりを維持する結合点となることが期待された。

各地を網羅してネットワークを強化するために，話し合いの結果，追

加の委員としてKazuo Kawai（カリフォルニア大学），George Mizota（スタンフォード大学），Tsutomu Obata（ウィスコンシン大学），Genjiro Yoshida（オーバン神学校），Robert Kamide（ユニオン神学校），L. M. Iwamoto（ハーバード大学），Yuki Domoto（ウェスレー大学），Kiyoki Yuya（南バプテスト神学校，ケンタッキー州ルイスヴィル），Tasuke Yamagata（ミズーリ大学），Chiyokichi Furuta（プリンストン）のメンバーがまず選ばれ，更にKo Sugimori（オハイオ・ウェスレアン大学），Arthur T. Fujimoto（オハイオ州立大学），Fumi Mitani（マウント・ホリヨーク），Kaname Yoshimura（ネブラスカ大学），以上アカギを除き総勢20名の委員が任命されて，JSCAの正式発足に向けて組織作りが始まった。

会の目的は，「北米キリスト者日本人学生の団結，キリスト者としての成長を促すこと，北米にいる日本人学生が日本にいる時と同様の一般的福祉援助を受けられるようにすること」と定められた[(9)]。メンバーは誰でも会の目的に賛同する者なら参加できる，ただし，事務を担うメンバーは教会に属する者であることとし，参加費は無料と決まった。

各所属大学に戻った委員は，さっそく大学内の日本人学生からJSCA結成への意見を聴取した。おおむね彼らの反応は良好だった[(10)]。オーバン神学校では，学生から「日本の文化や文明をアメリカに紹介すること，学生間に世界平和を推進すること」を会の目的として追加するよう提案があった。また，ハーバード大学からは「同じ信仰を持つ者同士の集会こそ価値がある」と意見が出され，プリンストンからも「霊的な土台を堅持することが，名称を正当化する」と，信仰的交わりを強調した意見が出ていた。一方でミシガン大学からは，日本人学生の半分はノンクリスチャンであり，メンバーに入ることをためらっているという報告も寄せられた。その他西海岸や南部からの報告は，いずれも好意的なものだった。

こうして，JSCA は全米ネットワークを整備し，正式に活動を始めるに至ったのである。委員やそれぞれの支部の代表者たちは，6 月に行われる YMCA 主催の夏季集会に参加して JSCA の新年度の活動について話し合うことになった。

このような経緯から見て，JSCA は親善委員会が全米各地の日本人学生会のネットワーク化をしようとした際の，1 つの終着点だったと考えられる。*The Japanese Student* を発刊して全米日本人学生会のネットワーク化が推し進められていったが，その運動をキリスト教精神に基づいて主体的に担う団体として結成されたのが JSCA だったのである。

Bulletin も，JSCA 自体が会の結成後正式に同誌の編集主体を担うようになった。言い換えれば，*Bulletin* は JSCA の機関誌となったと言える。それにより，それまでは各大学の日本人学生会が各号で紹介されていたのが，編集主体が JSCA に変更になってからは，各地区の支部（Unit あるいは Chapter）からの報告という形で掲載されるようになり，各大学ごとの報告は載らなくなった。つまり，日本人学生会のネットワーク化は，日本人キリスト者同士のネットワーク化に取って代わられることになったのである。

3．具体的活動

JSCA の具体的活動としては，以下の 4 点が挙げられる [(11)]。

第一に，印刷物の出版事業がある。それは *Bulletin* 以外にも，日本人学生名簿（*The Directory of Japanese Students in North America*）や，日本人学生が必要とする情報を掲載したパンフレット類（例えばアメリカの大学組織について，日本の教育制度について，など）を発行していた。

第二に，エッセイコンテストの開催もした。これは「過去 25 年にお

ける日米関係に関連した問題の研究を励まし，建設的な考え方ができるようにするため」という意図の下で開催されており，上位３名には賞金も用意されていた。

第三に，移動図書館の運営。日本語と英語の書籍を収蔵して地域を回ることも企画されていた。

第四に，実際的サービス。具体的には，入学に関すること，帰国に関すること，ヨーロッパ留学者に対して，アメリカやカナダへの旅行計画に対して，郵便サービスに関すること，本など物品購入に関すること，住居の相談，仕事探し，個人的宗教的問題に関する相談，日本について話せる講演者依頼など多岐にわたるサービスの提供をしていた。

このように，在米日本人学生の便宜を図ることをその主たる活動としていた。しかし，実際はそれだけでは済まなかった。次に，JSCA の直面していた課題について，検討してみる。

4．JSCA の直面した課題

現実のアメリカでは，ただ日本人学生の便宜を図るだけでは済まされない事態が進行していた。特に対外的な関係においては，重大な課題を抱えていた。

⑴　アジア関係

日本人学生たちが直面していた課題の１つは国際関係であった。特に，アジア近隣諸国出身者との関係及びアメリカとの関係が大きな問題だった。

まずアジア関係から見てみよう。ここで，1926 年４月号（Vol. II, No.7）に掲載されている，“Friendship Among Oriental Students” という見出しの投稿記事を紹介したい。デンバー大学所属の Seiichiro

Kanayaは3年前にアメリカに来て，「人種問題（race problem）」に衝撃を受けたと言う。Kanayaは問う，私たち日本人はアジア近隣から来た学生に対し，どのような態度を取っているだろうか，と。10年以上日本に滞在しているアメリカ人宣教師からかつて，「日本人と中国人が一緒にいて楽しい時間を過ごしているのをほとんど見たことがない」と言われたことがあったそうである。その言葉を思い出し，アジア出身者同士の友好を深めたいと訴える。Kanayaはコロラドに来て，東京でも同じ大学で学んでいた中国人学生に出会った。Kanayaの方から親しく話しかけたところ，日本よりもアメリカの大学での方がより安心した気持ちになれる，とその中国人留学生は話してくれた。こうした経験から，友情や親睦がキリスト教の教義でありJSCA運動のねらいであるならば，アジア出身学生同士の親交を深めることも，主たる目的の1つであるべきではないか，と主張している。当該記事では詳細は書かれていないが，シカゴで日中学生の交流プログラムが持たれているようで，デンバーでも昨年似たようなことを企画したが，今年はアジア人学生が他におらず，交流を持てないでいる，とも述べている。シカゴでの活動内容がデンバーの学生にも伝わっていることが，ここから分かる。このように日本人学生は，中国人学生との友好関係などアジア地域の者同士の交流を意識するようになり，キリスト教的交わりをJSCAに期待していた。

具体的にどのような取り組みがその後あったかと言えば，例えば1930年9月にイリノイ州で東洋出身学生会議（Oriental Student Conference）が，JSCA会長をその当時務めていたMasao Morikawa（シカゴ大学）が会議の議長の任に当たって開かれている。この会議には30名のアジア人（中国，インド，朝鮮，日本，フィリピン）と20名の西洋人が出席した。この会議は5年ほど前から開催されるようになっていたという。会議の目的は，表面的な問題の解決を急ぐのではな

く，自由且つ率直，また可能な限り科学的にお互いの視点について意見交流して，お互いの文化背景の正しい理解と深い関心を育てて真の友好を築くことであった。

盧溝橋事件前年にあたる1936年3月号の社説の中で，「政治的プロパガンダを流したり在米の他国学生たちとの間に友好的でない雰囲気を生み出したりすることは，本誌発行の目的ではない。カオスな状態にある今日の世界において唯一十分な解決策であるキリストの精神を伝えていくのが第一且つ根本的な目的である」と編集者は述べている[(12)]。この社説は「中国は日本と戦わねばならないか？」という衝撃的な見出しを掲げているが，十字架の道に従うキリスト者は，他者に対して憎しみや敵意を助長するような政治的動きに妥協してしまうことに十分注意を払う必要がある，と警告を発している。残念ながらこれ以降の *Bulletin* は管見の限り存在しないので，戦時下においてJSCAがどのような言説を取ったのかは不明である。しかし，キリスト教信仰を土台として政治的動きも見ようとしていた姿勢は1936年の記事からも伺える。

(2) 日米関係

日米関係や太平洋問題にも大きな関心が寄せられ，度々関連した記事や投稿が掲載された。1926年5，6月号（Vol. II, No. 8-9）には，「日本が考えていること　太平洋における日本　太平洋問題」という見出しで特集が組まれている。内容は，他誌の記事の翻訳紹介で，日本国内で日米関係がどう報じられているかを伝える内容となっている（p.4)。また同誌11頁には「日米戦争―幻想として（AMERICAN-JAPAN WAR ― AN ILLUSION)」というショッキングな見出しの記事も掲載されていた（p. 11)。執筆者はコロンビア大学のShuichi Haradaである。この記事は，多くのアメリカ人が，いつか日本との間で戦争が起こると幻想を抱いていることに驚いている，という書き出しで始まる。

しかも一部の層だけではなく知的階層においても広くこの話が広がっていると言う。

1920年にはいわゆる「第二次排日土地法」が成立した。日本人の借地権を禁じる内容で，日系人二世も土地所有が難しくなった。また1924年には移民法が成立し，アジア出身の移民は受け入れが全面的に禁止になった。このような措置は既にカリフォルニアを中心に在住していた日本人たちに大きな打撃となり，日米関係を悪化させる要因となった。しかし，記事執筆者のHaradaは結論として，現時点で日本は資源や資本，市場などを外国に頼っている以上，また若者もリベラリズムの空気を吸収しているので，日本政府も国運を奇妙な方向へは向けないだろう，日本は平和を希求している，と結んでいる。1920年代半ばに既に日米摩擦を危惧する声と，まだ戦争までは至らないだろうという楽観的観測が拮抗していた様子が伝わってくる。

1926年11月15日付（Vol. III, No.2）では，日本の学校へ人形を送る事業について報告されている（Doll Messengers of Friendship）。1927年のひな祭りに間に合うように，日本の学校へ届けるため，12月中旬に発送されるという。これは宣教師だったギュリックらが日米友好関係を築く取り組みの1つとして実際に行ったものである。ここにも，日米関係改善への動きへの関心が読み取れる。

更に，1927年3月15日付（Vol. III, No. 6）の記事では，ある大学内で起きた，極めて日常的な日米交流の様子が紹介されている。中西部の大学に通う日本人学生から，編集者へ届いた投書を元に構成された記事である。学期末になり社会学の講義が終わった時に，ある日本人学生の横に座っていたアメリカ人女子学生が手紙を手渡した。その内容は「最初見た時は，異なる国籍なので，あなたのことをよく分かりませんでした。しかし，先生がおっしゃったように，知り合うことが障壁を取り除くのです。あなたと知り合うことができ，全ての日本人への親しい気持

ちを持つことができました。アメリカ人が他の国の人たちのことをよく知らないことを，残念に思います。」という内容だった。この手紙をもらった日本人学生はとても感動したそうである。同記事の記者は，「この女性のような人は恐らくアメリカ各地域にもいることだろう。しかし，アメリカなど世界各地で学ぶ日本人は『友好大使（Ambassadors of Friendship）』としての活動を期待したい」と述べている。また，この話は，アメリカ人とだけでなく，全ての人種とより良い関係を築くことが，在米日本人学生の大いなる責務であり「使命」あることを証明しており，JSCA 運動の各メンバーが似たような経験をしたならば，人生がよりよい方向へと向かう価値あることに貢献したことになるだろう，と締めくくっている。

以上のように，JSCA にとって国際関係が大きな懸案事項であり，国際親善に対する関心が非常に高かったことが分かる。こうした国籍や民族による違いを乗り越えようとするキリスト教国際主義に湯浅八郎も共感をし，戦時下においてもアメリカで平和運動に携わったのであった[13]。

(3) 二世問題

JSCA 最初の代表者会議（エヴァンストン会議）は 1926 年 12 月 23 ～ 27 日にイリノイ州で開かれ，成功裡に終わった（1927 年 1 月 15 日号，Vol. III, No. 4）。この会議には，ミシガン湖の大自然に囲まれたノースウェスタン大学キャンパスに 16 の支部の代表者が集まった。この会議でも，日米関係，二世問題，日本人学生とキリスト教の問題等が議題になった。

二世問題とは何か。これまでの内容で分かるように，日本人学生と言っても，全てが日本からの留学生であったわけではなかった。既に紹介した人名のうち，英語の名前を持つ人も少なからずいた。すなわち，彼らの中には日系二世も含まれていると考えられる。日系一世と二世の世代

間格差は，大きな問題と認識され，JSCA 結成の比較的早い段階から，取り組むべき課題に挙げられていた。

1913 年からスタンフォード大学教授を務めていた市橋倭は，自らの息子との考えの違いについてこう述べている。

> 現在私に一人子供があります。私はご覧の通りの人間でありまして，兎に角最近の日本人のように欧米化した人間でありませぬので，封建時代の血が流れて居るのであります。寧ろ私など保守的な日本人かも知れませぬが，自分では日本人らしい日本人だと思って居ります。こう云う人間でありますから子供も出来るだけそう云う風にやって居るのですが全然駄目です。外国の感化と云うものは恐ろしいもので何をやっても駄目であります。（中略）日本語で話すと子供が逃げてしまいます。私の子供は中学の二年で十三でありますが，日本語をやれと云うといやがります [(14)]。

一世と二世とで自らのアイデンティティの捉え方に違いがあることが，この文章からも分かる。市橋は 1894 年に渡米し，その後 1914 年にハーバードで学位を取得するまで一貫してアメリカで学んだ，いわゆる日系一世である（夫人のけいも日系一世）。市橋自身は自らを日本人という意識を強く持っているが，息子がアメリカに「同化」していくことに為す術なし，と感じていた。

JSCA で最初にこの話題が取り上げられているのは，1925 年 1 月号（Vol. IV, No. 4）の社説である。ロイ・アカギが執筆した “Leadsers of Second Generation” という見出しの記事には，「二世問題は西海岸 JSCA メンバーたちにとって致命的な問題でありチャレンジである」「議論はされているが，実りは少ない」と現状が指摘されている。その後，この議論は，必要とされるリーダーシップを育成していくという使命と共に，JSCA 内で新たな動きとなっていった。

1925年3月号（Vol. IV, No. 6）には，サンフランシスコの日本語新聞が企画して，二世たちのための3ヶ月の日本旅行を実施した記事が掲載されている。参加した10名のうち4名はJSCAの働きに関わっている者たちで，他2名は南カリフォルニア支部とサンフランシスコ支部の会員であった。折に触れ，二世たちの日本への距離を縮めようとした取り組みが試みられていた。

1926年1月号（Vol. V, No.4）では，1面以上を使ってこの問題の特集を組んで，その背景やJSCAの対応について言及している。この問題の大きさが，記事から伝わってくる。

同特集記事によれば，西海岸以外の地域の人にとっては，そのような問題が存在するとは思いも寄らないだろうが，しかし特にJSCA西海岸支部は複雑にこの問題に巻き込まれている。この問題は先に市橋倭の例でも挙げたように，日系二世たちがアメリカ生まれでアメリカ市民として教育を受けたために日本への関心も親しみもなく，日本人コミュニティからはまるで外国人のような存在となっている。一方で彼らの外見は日本人そのものなので，反日組織からは日本人一世と区別されることがなく，二世たちは板挟み状態に陥っている。

記事は，この問題は西洋と東洋の出会いが生み出した問題と指摘，この2つの交流が進めば，東西文化の融合が起きるかもしれない，だからこの問題は単なる地域の問題ではなく世界規模の問題であると見解を述べ，解決すべき問題であることを強調している。

一世世代との関係やアメリカ社会との関係に問題が生じていることは先ほども指摘したが，二世には職業上の問題も出てくる。つまり，これまでは一世世代が切り拓いた職業（労働者，農家，園芸家，清掃業，行商人など）を受け継ぐこともできたが，日本人相手では仕事としてキャパシティが小さく限界がある。しかし，アメリカ社会にも日系人への偏見があるために新たな仕事口を探すのは容易ではない。一世の影響力が

二世に対して弱いため日本人社会で共通認識されている社会的常識とその背後にある考え方について何も知らない一方で，アメリカ人社会からも排除されているため，アメリカ社会での常識的な振る舞い方についても知らない。そのために，二世たちの社会生活が不安定になり，犯罪に向かう傾向も見えると言う。

更に，宗教生活にも支障を来している。日本人教会は一世世代を想定して作られているため，言語や社会・文化の多様性は考慮されていない。個々に見れば障壁を乗り越えてアメリカ人教会に通う二世もいるが，反日的雰囲気が広く西海岸地域に広がっているため，概して二世たちはアメリカの教会に居場所がない。日本人教会の中には二世のためのプログラムを導入しているが，経験不足などからまだ道半ばの状態である。つまり，これは教会の二世との関わり方の問題でもあり，リーダー不在の問題でもある。

このような実情を考慮して，JSCA 活動の多くはこの問題に対処すべく，信仰面だけでなく将来の社会活動にもつながる，二世も参加しやすい企画を色々と提供した。JSCA のこうした活動の中から，日米の幸福な連帯を体現する二世リーダーが育成されていった。

その後も，南カリフォルニア支部では二世のためのコンサートを企画したり[15]，投書で二世のための宗教センター開設が要求[16]されたりするなど，二世問題は大きな課題として JSCA の前に立ちはだかった。

日系二世の問題は，ナショナリティの所属に関する問題，特に複数のナショナリティを有する人が抱える葛藤の問題として，現代的な意義を投げかけている。戦時下においてカリフォルニアを中心に日系人が強制収容された際，アメリカに忠誠を尽くすかどうかで収容場所や処遇が変わっていた。JSCA がこの問題にどのような対応をしていたのか，今回は史料上の制約があるため考察できないが，今後の課題としたい。

結論

以上考察してきた通り，JSCA は，20 世紀初頭からアメリカ各地の大学等で作られていた日本人学生会が 1916 年以降外国人学生親善委員会の支援により連携ネットワーク化していくのを受けて，更にそのネットワーク化を今度は大学単位ではなく，キリスト教という信仰をベースにした連携の強化という形で生み出された全米組織だった。それは日本人学生同士の親睦以外にも，日本人キリスト者同士による交わりの組織として機能することとなった。具体的な活動は各支部が行ったが，全国レベルで活動の連携が進んだのは，JSCA という組織の確立と機関誌 *Bulletin* の発行によるものと考えられる。一方で，キリスト教色を全面に出すことで，各大学の日本人学生会という宗教とは関係のない団体とは徐々に関わりが薄くなっていった。

結成の目的は日本人学生の便宜を図ることであり，彼らのための数々のサポートが用意されていた。ただ単に，日本人キリスト者学生同士の交流を促していたのではない。日本人学生が直面していた国際関係，特にアジアやアメリカとの関係がキャンパスにおいても様々な摩擦になり得ていた。しかし，本文でも紹介したように，日本で中国人学生と会うよりも，アメリカで会う方がより親しくなれたという話は，こうした民間交流の意義を教えてくれる事例と言えるだろう。日米摩擦においても，直接アメリカ人と日本人が知り合うことで理解が進み交流が深まる，という国際交流の最も基本的な事項が確認されている。特にキリスト教という世界宗教を基盤としていることで，ナショナリティを超えて国際的連帯を促せる特性があった。何より，YMCA や外国人学生親善委員会との強い関わりが，こうした世界平和の模索へと活動を広げることとなった。

一方で，西海岸の日本人たちが直面していた二世問題は，一世と二世の断絶と同時に，日本人社会とアメリカ人社会との断絶をもたらし，JSCA でも大きな課題となっていた。JSCA では，二世学生も参加しやすいような内容を企画し，二世の中から日本人学生のリーダーとして活躍できる人物を育てようとした試みもあった。実際に，*Bulletin* に登場する人名に日系人と思われる名前が数多く含まれており，こうしたリーダー育成の試みが功を奏したとも考えられる。また，「日本人学生（Japanese student）」という概念は日本からの留学生を指すのではなく，アメリカで育った日系人二世をも含んでの集団であると，捉え方が変化していった。

こうしたキリスト教国際主義に基づいた団体ではあったが，日本人であることへのこだわりを柔軟に捉えるということではなく，あくまでもナショナリティを前提にした集団でもあり続けた。その点，アイデンティティの多様化について，どのような見識を当時のキリスト者たちは持っていたのか，この後改めて考察してみたい。

本研究は，科学研究費基盤研究(C)「近代日本における在外友好・学術交流団体形成過程の研究」（2015 ～ 2017 年度）の成果の一部である。

注

（1） 辻直人「20 世紀初頭における在米日本人学生ネットワーク形成の背景と意義」『北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要』第 8 号，2016 年，pp.99-110。辻直人「戦前期 YMCA による国際交流事業についての一考察」『北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要』第 9 号，2017 年，pp.187-198。

（2） 辻前掲論文（2016 年），p.107。

（3） 辻直人「湯浅八郎の国際感覚に対するアメリカ滞在の影響―イリノイ大学留学経験を中心に―」立命館大学『社会システム研究』第 36 号，2018 年，

pp.35-56。

（4） Kautz Family YMCA Archives に所蔵されている *Bulletin* は 1922 年 5 月の創刊号以降 1930 年 10 月合併号（Vol. VIII, No. 1）までの毎号（一部欠号あり）以降は，1936 年 3 月号（Vol. XV, No. 1）まで飛んでおり，以後の号は保管されていない。そのため，最終号がいつなのかは，判然としない。

（5） *Japanese Student Bulletin*, Vol. I, No.1, May 1922, p.1.

（6） *Japanese Student Bulletin*, Vol. VI, No. 1, October 15, 1929, p.7.

（7） カリフォルニア大学バークレー校史料室（University Archives, UC Berkeley）に所蔵されている *Campanile Review* で最も古いものは, Volume 1, No.2 の 1932 年 12 月発行分である。

（8） "Early History of the J.S.C.A.", *Japanese Student Bulletin*, Vol. V, No.2, November 15, 1928, p.1.

（9） *Japanese Student Bulletin*, Vol. III, No.3, February 1924, p.1.

（10） *Japanese Student Bulletin*, Vol. V, No. 2, November 15, 1928, p.4.

（11） The Japanese Student Christian Association in North America, *The Directory of Japanese Students in North America 1925-1926*, pp.8-11.

（12） "Editor's Note", *Japanese Student Bulletin*, Vol. XV, No. 1, March 1936, p.2.

（13） 辻前掲論文（2018 年），p.48。

（14） 市橋倭『私の見たアメリカの近況』太平洋問題調査会，1932 年，p.20。

（15） *Japanese Student Bulletin*, Vol. II, No. 7, April 1926, p.2.

（16） *ibid*., p.3.